

令和7年度 国語部の研究

Ⅰ 研究主題・副題

自らの学びを創ろうと主体的に学び続ける学習者を育む国語科学習

～学びのつながりを重視して～

(1) 主題設定の意図

学習指導要領に述べられているように、今の子どもたちが生きるこれからの時代は社会構造や雇用環境などの急速な変化により予測困難な時代となっている。そのような時代において子どもたちが豊かな人生を歩んでいくためには、変化や困難に前向きに立ち向かい、他者と協働しながら主体的に学び続け、持続可能な未来を切り拓こうとする態度を育むことが必要である。

このような考えのもと、大阪市教育研究会国語部では、令和5年度より「未来を創る学び手を育成する国語科学習」を研究主題に掲げ、研究・実践を行ってきた。副題を「論理的な思考を働かせ、意識的に言葉を用いる説明的文章の指導」とし、以下の2点を視点として設定した。

視点1 筆者のものの見方・考え方、主張、論理に着目した学習材分析を行い、単元を構成する

視点2 評価基準や振り返りの方法を明確にし、単元計画に位置付ける

これら2点の視点をもとに、各委員会による具体的な実践が行われ、以下のような成果を得ることができた。

- 筆者のものの見方・考え方、主張、論理に着目した学習材分析を行うことで、論理的な思考を働かせ、意識的に言葉を用いるための資料や学習課題、発問、言語活動を設定することができた。
- 単元計画に評価基準や振り返りの方法を明確に位置付けることで、より単元への学びを自覚することにつながった。

一方、課題として以下の3点が明らかになった。

- 学習者が自ら学びを進めていくことができるよう、学習の方法、量（時間）、表現方法（成果物の選択制の導入）などを学習者の特性や興味関心に応じて自ら選ぶことができるような学びの在り方を具体的に模索する。
- 学習者が、発達段階に応じて自らの学びを「把握」するのみならず「調整」することができるよう、単元計画や振り返りの内容・方法を工夫する必要がある。
- より効果的な学習活動や振り返りを行うために、必要に応じてICT機器を活用する方法を模索する。

これまでの研究の成果と課題をふまえ、令和7年度は、研究主題を「自らの学びを創ろうと主体的に学び続ける学習者を育む国語科学習」とし、研究を進めていく。

具体的には、「自分で学び方を選び、学びを進めている実感」をもちながら学ぶ学習者の姿をめざす。さらに、「みんなで学ぶことが楽しい」「みんなで学んでよかった」と協働しながら学ぶことに喜びや価値を感じ、集団として学びを深め、ともに高め合おうとする姿勢を育みたい。

(2) 副題設定の意図

「学びのつながりを重視する」という副題には、以下のような三つの意図を込めている。

一つ目は、「学習者が、自らの学びの積み重ねを実感することができるようにする」ということである。小学校学習指導要領解説においては「(3) 学習の系統性の重視」として「国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着を図ることを基本としている。」と述べられている。主題にあるように、学習者が「自らの学びを創ろうと主体的に学び続ける」ためには、学習者自身が、「これまでの学習で、自分たちはどのような力を身に付けてきたのか」、「これまでに身に付けてきた力のうち、今回の学習で生かすことができそうなものはどれか」を自覚した上で学習にのぞむことが必要である。

二つ目は、「学習者が、交流を通して個々の学びをつなげることができるようにする」ということである。

「主題設定の意図」においても述べたように、学習者が「豊かな人生を歩んでいくためには、変化や困難に前向きに立ち向かい、他者と協働しながら主体的に学び続け」ることが不可欠である。互いの考えやその理由、根拠を交流することによって、自己の考えを変容・発展させながら課題の解決へと向かうことが、集団で学ぶことの意義である。

三つ目は、「学習者が、国語科の学習を通して学んだことを、日常生活につなげることができるようにする」ということである。例えば、「令和6年度経年調査 児童質問紙資料」によると、大阪市の6年生の「学校の授業時間以外の1日の読書量」の項目において、「全くしない」と答えた児童の割合は32.8%、「10分より少ない」と答えた児童の割合は17.3%であり、ほぼ半数の児童が「ほとんど、または全く読書をしていない」と言える。さらに、同調査から、「ほとんど、または全く読書をしていない」児童の割合は、年々増加していることが明らかになった。小学校学習指導要領解説において、読書は「国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである」とされているにも関わらず、学校の国語科の学習で学んだことが教室での学びにとどまり、日常生活につながっていないという課題がある。

以上のことをふまえた上で、本年度、国語部では「学びの積み重ね」と「他者との協働」、「学習と日常生活」という三つの「学びのつながり」を重視しながら研究を進めることとした。その際、各学年委員会では、「読むこと」領域の文学的な文章に焦点を当てる。

2 研究の概要

(1) 各委員会におけるめざす学習者の姿

本研究では、各委員会におけるめざす学習者の姿として、以下のとおり設定している。

低学年 文章の内容と自分の体験とを結び付けて理解しながら、自分の思いや考えをもとうと楽しんで読む

中学年 文章を読んで理解したことに基づき、自分の思いや考えをまとめようとしながら進んで読む

高学年 文章を読んで理解したことに基づき、自分の思いや考えを広げようとしながら進んで読む

書写 文字を大切にし、学んだことを日常生活に生かそうとする

(2) 研究の視点

視点1 学習者が「学びのつながり」を意識して学習を進めるための単元構想

指導者は、目の前の学習者がこれまでにどのような力を付けてきたか、どのような学習経験を積んできたのかを把握し、学習者が学びのつながりを自覚することができるような手立てをうつとともに、学習者がこれまでに付けてきた力を生かすことができるような学習計画を立てなくてはならない。また、学習者が「新たにどのような力を身に付けることができたか」、「身に付けた力を、今後の学習や生活にどのように生かしていきたいか」を、言葉によって振り返る機会を設けることも必要である。

① 学びのつながりを重視した「付けたい力」と言語活動の設定

前単元までの既習事項や次単元以降に付ける力を踏まえ、本単元で「付けたい力」を明らかにする。その際、学習者の既習事項の習得状況や学習経験（言語活動の経験）、読書経験などの実態を把握した上で、学習者にとって本単元で扱う教材の難易や実生活との距離など、学習者の反応を想定しながら学習材分析を行う。学習材の特性と学習者の実態、指導事項を照らし合わせて、「付けたい力」を具体的に想定する。その上で「付けたい力」と学習材の特性に適した言語活動を設定する。

さらに、「付けたい力」と学習指導要領における指導事項を踏まえ、単元目標を達成した学習者の姿を具体的に想定する。

	学習指導要領における指導事項	→	単元目標を達成している学習者の姿
	付けたい力：登場人物の性格を想像し、伝え合う		
知	様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、語彙を豊かにしている。		中心人物の性格を表す語句、性格とつながる気持ち、様子、行動を表す語句を見付けている。
思	登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像している。		中心人物の性格について、境遇や物語全体に描かれた行動・会話と結び付けたり、言い換えたりしながら考えている。
思	文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。		中心人物がどんな人物かを、性格を表す語句を用い、叙述を根拠として自分の言葉で説明している。

② 学習者が学びのつながりを意識しながら、見通しをもって主体的に学びを進めることのできる単元計画の作成

学習者が、今までの学びを生かしながら学習を進めることのできる単元計画を立てる。例えば、学習者が既習事項を振り返ったり生かしたりする場合や、言語活動の成果物の例を指導者が提示することで学習者が見通しをもつ場を意図的・計画的に設けるようにする。

また、学習者が 目的意識や学びの必然性を感じながら主体的に学習を進めるために、「初発の感想」と関連付けながら付けたい力に応じた学習課題を作ったり、学習者の発達段階に応じて「一人学び」を取り入れるなど、単元計画を工夫する。

③ 学習者が学びを自覚し、学びを調整するための評価基準や振り返りの方法の明確化

【評価基準】

上記①の表で示した「単元目標を達成している学習者の姿」は、「何ができるようになればよいのか」という評価規準ともなる。この評価規準を基に、さらに具体的に、「何がどこまで(どの程度)できていればおおむね満足できる状況(B 評価)」なのかという評価基準を設定する必要がある。

このようにして設定した学びのゴールは、指導者のみが知っていても、学習者がそこに向かって自ら学びを進めることにはつながらない。そこで、学習者の発達段階に応じ、単元計画の適切な時間において、成果物やその内容の例を明示したり、学習課題(めあて)の中で評価規準と対応するような言葉を用いたりすることによって、指導者と学習者とで学びのゴールを共有する場を設けるようにする。

また、学習者の実態に応じて、「おおむね満足できる状況(B 評価)」以上に到達することができるような個別の手立てについても計画しておくようにする。

【振り返り】

学習者自身が自らの学びを自覚し、学びを調整しようとするためには、「何ができるようになったのか」、「どのように学習を進めることで、できたのか」などについて、自分の言葉で表現する場を設定する必要がある。また、指導者が学習者の「主体的に学習に向かう力」を見取るためにも、言葉による学習の振り返りが不可欠である。その際、学習者の発達段階に応じて、自らの学習のめあてを達成するために自分がとった方法(特に交流について)と、その有効性について振り返ることのできるような振り返りの観点を示す。さらに、他者と協働して学ぶことのよさについても振り返ることのできる観点を示すようにする。

視点2 学習者が、主体的に自分の思いや考えをもったり伝え合ったりすることができる学習活動の在り方

① 学習者が進んで課題解決に向かうことができる学習課題や発問の工夫

学習者が進んで課題解決に向かうためには、学習者が「進んで考えたい」、「互いの感想や考えを知りたい」、「伝え合ったことをもとにもう一度考えてみたい」と思えるような問いを立てる必要がある。そのために、以下の表に示すような「主に働かせる思考」や、「学習用語」に関連した叙述に着目しながら発問や課題を明確に設定する。

主に働かせる思考	内容	指導者の発問例	学習者の発話例
比較	いくつかのものごとを、同じところ似ているところ（同一性）に目をつけて比べる力・違うところや反対のところ（差異や相違）に目をつけて比べる力	・二人の「悲しい気持ち」は同じでしょうか。	・がまくんは、～だけれど、かえるくんは～。
順序付け	いくつかのものごとの手順、時間や空間や因果や関心などの強さや重要さなどで順序付けれる力	・登場人物を出てきた順に並べましょう。	・まず、のらねこが来て、次にとなりの犬が来て……。
理由付け (関係付け)	ものごとの結果を引き起こした原因、判断を下した主な理由、連鎖や循環をなす因果関係などを明らかにする力	・どこから(どの言葉から)、そう思いましたか。 ・この物語が悲しい終わり方になった理由は何でしょう。	・がまくんだけでなくかえるくんも幸せな気持ちになったわけは～(叙述)です。
類別	目的に合う観点を決めて、いくつかのものごとを区別したりまとめたりする力 また、特徴をつかむ力	・行動を手がかりに、中心人物の性格を、整理しましょう。 ・中心人物の心情が表れている情景描写を見付けましょう。	・豆太のおくびょうな性格がわかる行動は、〇〇と〇〇です。 ・「真っ赤にもえて」という情景描写から、大造じいさんの……。
定義付け	ものごとを総合し、抽象化して表したり、簡略に表したりする力、またそのような言葉の意味内容を明らかにする力	・「海のいのち」とは何を表しているのだろうか。 ・この物語を読んで受け取ったメッセージを、一言で表すと何だろう。	・「海のいのち」とは、……という生き方と……を表していると思います。
推論	知識や経験を基にして、「知らない、分からない、これからの……」などのものごとについて、筋道立てて推し測る力	・「ぐったりと目をつぶったまうなずいた」とき、ごんはどんな表情だったと思いますか。	・ごんは、ほほえんでいたと思います。なぜなら、本文中に…という言葉があることから、ごんの思いが兵十に……。

参考文献・引用：櫻本明美「説明的表現の授業—考えて書く力を育てる—」（明治図書、1995）

西郷竹彦「ものの見方・考え方」（明治図書、1991）

伊崎一夫「『見方・考え方』を鍛える小学校国語科の『思考スキル』」（東洋館出版、2018）

大阪市教育研究会国語部研究紀要資料

	低学年	中学年	高学年
学習用語 (言葉の力、 学習で使う 言葉より)	したこと いったこと 人物の様子 わけ(理由) 昔話のおもしろさ 時 場所 人物 出来事 場面 感想 作者 主語・述語 順序	様子を想像する あらすじ 中心人物 会話文・地の文 語り手 人物の性格 物語のしかけ 人物の気持ちの変化 情景 物語の山場 もく読 題名の持つ意味 物語の終わり方	物語の全体像 人物どうしの関係 構成 情景 描写 表現のくふう 構成や題名のくふう 人物像 朗読 情景描写 表現の効果 物語が自分に語りかけてきたこと
言葉の広場	学校・家・町や村に関係があるものの名前 暮らしの中でよく使う言葉 身近な人を表す言葉 物の様子を表す言葉 人の体を表す言葉 人がすることを表す言葉	思いや考えを表す言葉 順序を示すときに使う言葉 人物の気持ちを表す言葉 人物の様子を表す言葉 もの(物事)の様子を表す言葉 理由を言うときに使う言葉 人物の行動を表す言葉 人物の性格を表す言葉 引用するときに使う言葉 比べるときに使う言葉	関係を示す言葉 つながり言葉 原因と結果を表す言葉 思考に関わる言葉 人物像や心情を表す言葉

② 学習者が課題解決に向かって自らの学び方を選択できる交流形態・方法の工夫

どの学年においても取り組む「学習の調整」のための手立てとして、学習者が課題を解決するために、それぞれの「ニーズ」にあった交流を行うことができるように工夫する。

学習者が他者と考えを交流することの目的は、最終的には「学習課題を解決する＝めあてにせまる」ことにあると言える。しかし、交流にあたって、課題に対する考えをどの程度もつことができているかには個人差があり、この差によって、個々の学習者が交流に対して期待する事柄（ニーズ）は異なると考えられる。

【学習者が交流に対して期待するであろう事柄の例】

- ① 「どのように考えるべきかがまだ分からないので、自分の考えをもつために、他の学習者の考えを知り、参考にしたい」
- ② 「ある程度、自分の考えをもつことはできたが、妥当性に自信がなかったり、まだはっきりしない部分があったりするので、考えをより確かなものにするために、他の学習者と相談したい」
- ③ 「ある程度、自分の考えをもつことはできたが、この考えを表すために、より適切な表現がないか、他の学習者の表現を参考にしたい」
- ④ 「自分の考えや、その理由を明確にまとめることができたので、この考えや理由が他の学習者にもしっかりと伝わり、納得されるかどうかを確かめたい」
- ⑤ 「自分の考えや、その理由を明確にまとめることができたので、いろいろな相手と伝え合い、他にどんな考えがあるのか知りたい」

どの学習者も「交流してよかった」「交流したかいがあった」と感じられるようにするためには、上に例示したようなニーズが交流によって満たされることが必要である。

そのためには、交流にあたって、個々の学習者が「自分が課題に対して考えをどの程度もつことができているか」を自覚することができるような促しとともに、学習者が「どのような相手と、どのように交流すれば、課題に対する自分の考えがより確かなものになるか」を自ら判断し、選択することができるような交流の在り方が求められる。

指導者には、交流の段階に入る以前に、上記の①の段階にある学習者に対する個別の支援を行ったり、学習者がそれぞれのニーズに合った相手と交流することができるような手立て（例えば「考えの違い」や「自信度」が互いに一目で分かるような工夫など）をうったりすることが求められる。また、学習者が、互いに異なる考えがあることを認め合い、協働的な学びの中でともに高め合おうとする姿勢をもつことができるような手立てを講じることが必要である。

視点3 国語科の学習と、日常生活とをつなげるための手立て

各学年委員会においては、学習者が進んで読書をし、楽しみながら学ぶことができるような読書環境の充実をはかる。「副題設定の意図」でも述べた通り、読書は「国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである」。「読書に関する事項」（小学校学習指導要領解説）を踏まえて「読むこと」の指導をすることにより、国語科の学習が読書活動に結び付くようにする。

わが国の言語文化に関する事項―読書―

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
エ <u>読書に親しみ、いろいろな本があることを知る</u> こと。	オ <u>幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付く</u> こと。	オ <u>日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付く</u> こと。

（小学校学習指導要領解説 国語編）

具体的には、単元の学習で扱う学習材と関連する図書資料を選定し、学習者がいつでも手に取って読むことができるような環境を整えるようにする。例えば、同一作者による他の物語や、学習材と舞台や主題が共通する物語を集めたり、学習材に出てくる人物や環境などについて理解を深めることができるような資料を集めたりすることが考えられる。

単元で付けたい力によっては、同一作者の作品や、舞台、テーマなどを同じくする作品を読み広げることを学習活動として位置付けることも考えられる。そうではない場合においても、いつでも手に取ることができる場所に関連図書がある環境を整えておくことは重要である。

「令和6年度経年調査 児童質問紙資料」の「学校の授業時間以外の1日の読書量」の項目において、ほぼ半数の児童が「ほとんど、または全く読書をしていない」と回答したことの背景には、時代の流れにより余暇の過ごし方が変化してきたことや、家庭などの身近な環境において「図書」に触れる機会そのものが減ってきていることが影響していると考えられる。まずは読書環境をいっそう整えることによって、読書が「必要な知識や情報を得ること」や「自分の考えを広げることに役立つこと」に気付く機会を増やし、学習者が日常生活においても読むことの楽しさやよさを感じることにつながられるようにする。

また、書写委員会においては、これまでの実践を踏まえ、書写学習で身に付けた技能を、日常生活にも生かして使うことができるようにする。例えば、他教科でノートに文字を書く際などに、書写学習で学んだ事柄を想起するように促すことで、学習者が、身に付けた技能を進んで生かすことができるようにすることなどが考えられる。